2026 愛知・名古屋アジア大会

個人タイムトライアル

6位（タイム：38’22”82）



日本自転車競技連盟



日本自転車競技連盟

今回のアジア大会では、個人タイムトライアルとロードレースの2種目に出場した。

どちらの種目も起伏が激しく、テクニカルなコースであった。パワー、スピード、テクニックのすべてが試される、アジア大会にふさわしいコースだというのが第一印象だった。

タイムトライアルのコースは、ほとんどの区間が対面通行で、道幅も1車線分しかなかった。そのため、前の選手に追いついた場合、チームカーと選手を追い越すための幅しかなく、難しい判断が求められるコースだった。

さらにコーナーも多く、どこでエアロポジションを取り、どこでバイクのコントロールを優先するかを考えながら走る必要があった。そのため、試走は入念に行い、すべてのコーナーと路面状況を頭に入れてレースに臨んだ。

スタート順は現UCIランキング順で決められた。アジアの中でもUCIランキングが低い日本は第1グループでの出走となった。優勝候補の選手がいないグループであり、目標タイムや他の選手の走りを基準にできないという点では、少し不利なスタート順だった。

しかし、タイムトライアルはタイムで勝負する種目であり、どのスタート順であっても全力で走ることに変わりはない。「やるしかない」と気持ちを鼓舞し、スタート台に立った。

前日に雨が降った影響で、第1グループのスタート時には路面が若干濡れていた。1周目は飛ばしすぎず、路面状況を確認しながら走るイメージで入った。

1周目を終え、いよいよ勝負の2周が始まる。路面はまだ濡れていたものの、滑りやすい場所は限られていたため、2周目からはコーナーもある程度攻めて走ることができた。

2周目に入ると、グループ内で暫定トップのタイムで計測地点を通過した。さらに前の選手に追いついたが、タイミングよくスムーズに選手とチームカーを追い越すことができ、タイムロスもなかった。

3周目は全開で走ると決めていた。この周だけは出力を確認することもやめ、チームカーから無線で伝えられる残り距離だけを頼りにペダルを踏み続けた。

ラスト2km。もうこれ以上は走れないと思うほど脚が痛み、感覚もなくなってくる。それでも最後までペダルを回し続け、第1グループのトップタイムでレースを終えた。

その後、第2グループの結果を待ち、最終的に6位でレースを終えた。

悔しい結果となったが、2日後のロードレースに向けて気持ちを切り替えた。次こそはメダルを獲得できるよう、攻めた走りをしたいと思った。



日本自転車競技連盟

個人ロードレース

5位（優勝者から＋2’11”）

ロードレースのコースも、これまで経験したことがないほどテクニカルで、道幅の狭いコースだった。トラブルが起きた場合、場所によってはレースへの復帰が難しくなることを意味しており、終始緊張感のあるレースとなった。

コースは、まずラインコースを走り、周回コースを3周した後、最大勾配12%の登りがあるラインコースを再び走ってフィニッシュへ向かうレイアウトだった。



日本自転車競技連盟

勝負は最終周からラインコースに入るまでの展開で決まると考えていた。日本チームとしては、そこまではチームでまとまり、動きがあれば対応するという作戦でレースに臨んだ。

予想通り、レースは最終周まで大きな動きがないまま進んだ。また、ペースがかなり落ちる場面もあり、レースの展開を読むのが難しいと感じることもあった。

最終周、最大勾配12%の登りがあるラインコースに入る手前、周回コース最後の登りでペースが上がると、そこからカウンターアタックが次々とかかる展開となった。しかし、その時点で日本チームは私だけが先頭集団に残る状況になってしまい、ライバル国に対して若干不利な展開となった。

最終局面で勝負するため、すべてのアタックに反応するのではなく、有力候補の動きに絞ってマークすることを意識した。



日本自転車競技連盟



日本自転車競技連盟

そして、最終周の下りに入る手前の登りで、最後のアタックがかかった。しかし、その動きには有力候補が反応していなかったため、一瞬ためらってしまい、反応が遅れてしまった。そのアタックに2名が反応したが、追う選手はいなかった。

下りに入るまでに追いつかなければ、メダル獲得はかなり厳しくなる。そう判断し、自ら集団の先頭に立って追走を開始した。下りも全力で攻め、3位の選手とは約10秒差で、単独4位の位置で下りを終えた。

そこからさらに前を追ったが、差は縮まらず、後ろの集団に合流する形となった。その時点で、脚はほとんど残っていなかった。

最後の登りに入ると、あとは全力でペダルを踏み、前を追うしかなかった。登りを終えた時点で3位との差は1分以上に広がっており、その先は単独4位の選手を追う形で5位集団を走った。

メダルには届かない状況だったが、1つでも順位を上げてゴールすることを目指した。そして、ゴール手前1kmでアタックを仕掛け、単独5位でフィニッシュした。

一瞬の迷い、そして守りに入ってしまった走り。それらが今回の結果につながってしまった。

エースとして臨んだ今大会。チームとしても個人としてもメダルを狙っていただけに、本当に悔しい結果となった。

今回の経験から学んだことを来シーズンに活かしていきたい。そして、来年から本格的に始まるオリンピック選考に集中し、ロサンゼルス五輪への出場を決められるよう、引き続き頑張っていきたい。



日本自転車競技連盟